

も、譜代藩庁クラスから地名しか残っていないような里山の砦まで様々である。城が防御施設として機能した年代と浅間社が祀られた年代が明確ではない為に、城の稼働と浅間社の創建に因果関係があるかわからない例も少なくない。地域的には、群馬・栃木・埼玉県北部といった北関東と信州即ち長野県地域に多く、富士信仰が盛んに行われていた地域と一致する。

浅間社の立地としては、平城では城外郭の土塁（例・高崎城）やそれに相当する場所（例・岩槻城）、山城や砦では本丸（例・坂戸城）または山頂かそれに近い場所（例・小沢城）が多いように思われる。砦や烽火台の場合はそれ自体が本城に付属する防御施設である（例・榎下城に対する浅間山砦。また山城の場合、尾根伝いに隣接するピークに祀られている例（青山城）がある。砦や烽火台になるような丘陵のピーク、または尾根沿いに祀られるという立地は特徴的であり、「浅間社は低山や丘陵の高い所に祀られやすい」と表現することもできよう。特に中世に創建された蓋然性の高い浅間社は城外の独立した立地にある例が多い。

城が稼働している時期に城内や隣接する場所に祀る神を勧請する場合、その神には城を防御するよう祈願をこめると考えられる。しかし、このような目的のために浅間社が選択される機会は決して多くなく、またそのような選択そのものをする地域も限られている。城の内外に祀られる浅間社の絶対数が少ないこともさることながら、他の社が城の鎮守となっていることもあり、浅間社が城の鎮守として一般的に重視されていたとは言いがたい。事例収集の過程で見かけた限り、城の鎮守には

八幡社や諏訪社または秋葉社が多いように思われ、むしろ浅間社より城の中心部に近いところにこれらの社を祀った例（福平城や岩槻城）も見られる。

ただし、八幡社などの社を砦や山城の山頂で見るとはほぼ無かったと言つてよく、この点に浅間社を祀るに好ましい立地を見出せるのではないか。他の信仰による社には見られない立地があること、また廃城後に浅間社を祀る立地として利用されることもあった、という二点は、富士信仰の特色といえるのではないか。

蛇足ながら、こうした浅間社の神は、特に中世に祀られた浅間社においては、富士山の神かもしれないが（山城の場合は富士山であることを意識せず「その山の神」という感覚だったのかもしれない）、記紀神話の神・コノハナサクヤヒメでは無かった。富士信仰の歴史を通じて、富士山の神としてこの女神があてがわれた形跡は、現在のところ天正年間（一五七三—一五九三）より遡れないからである。

明治期における富士講系教派神道による他信仰との交流

今井 功一

富士講系教派神道の一である實行教は、明治二十七年に月刊誌『惟一』の刊行を開始した。発行所は「實行教本館内惟一社」という組織で、発行人には当時の管長・柴田礼一の子である柴田孫太郎の名が記されている。上下二段組みA五判の毎号五十頁前後で刊行されたこの月刊誌は、決して信者だけを対象にした物ではなかった。實行教の布教伝道とその活動の報告に

加え、宗教界をめぐる情報やその他の論説及び読み物等が掲載された、実行教の教報という性質を持つと同時に総合宗教雑誌とも表現しうる媒体であった。ゴシップめいた記事も少なからずあるにせよ、当時の宗教界に広く目を配った情報収集をおこなっている。神道教団による宗教雑誌ということもあってか、他教、特にキリスト教に対する厳しい態度を見ることができ、一方、万国宗教会議での体験もあり、会議の中心人物であったパウズの紹介による来日牧師や宗教学者の来館を誇らしげに報じる面もある。また、神道系教団の不祥事を取り上げることもしばしばであった。

『惟一』は広告料と購読料という二つの収入を得ていた。誌面に掲載された広告は、多くが宗教雑誌、宗教系出版社が出稿したものであった。惟一社あるいは実行教本館に送られてきた雑誌を紹介する寄贈雑誌の欄も同様で、文芸誌の名も見えるが中心は宗教雑誌であった。そこには神宮教院の雑誌『教林』や、柴田礼一も関わっていた大八洲学会の刊行物といった神道国学系のもは言うに及ばず、仏教系、さらにはユニテリアンをはじめとするキリスト教系の雑誌も見ることができ、

『惟一』刊行のタイミンクは、明治二十六年にシカゴで行われた万国宗教会議の翌年である。柴田礼一が万国宗教会議に出席したという、実行教にとって実に晴れがましい出来事を受けて刊行されたものであった。実際、初期のメインコンテンツのひとつはまさに柴田礼一によるシカゴ見聞録であった。鈴木龍久氏は『明治宗教思潮の研究』（東京大学出版会、一九七九）で柴田礼一が受けた万国宗教会議の自由主義的比較宗教学的空気

の影響について、愛国的ナショナリズムのなかにも隠し切れないうと評している。これは柴田礼一の個人的な論調に留まらず、右のような雑誌の作り方や掲載内容にもあらわれているということができらう。

これまで、実行教の歴史はこの後明治四十三年十一月に刊行された千葉幸吉『神道実行教』（実行教本庁、一九一〇）に負うところが少なくない。そこでは実行教の歴史は、角行に始まる道統と、柴田花守、世界宗教会議の三点について述べられるにすぎず、クロードであったかも教団が単体で成り立つてきたような記述になりがちであった。しかし、この雑誌自体が単に教団内部向けの雑誌ではないことは掲載内容やその作られかたにも見て取ることができる。実際、神道教団、仏教教団はもとよりキリスト教系の団体とも、世界宗教会議をふまえて交流があった。その後の日本の宗教界において柴田が顔を出すなど、この時期以降の実行教及び柴田の日本宗教界における一定の存在感について考えると、単に世界宗教会議と同じメンバーが再召集されたというだけでなく、こうした継続的な活動も見逃すことはできないであろう。『惟一』の確認できる限りの最終号は東大所蔵の四十八号であるが、この号には最終号であることは明記されていないため続きがある可能性もある。これまでの『惟一』について触れた文献は非常に少なく、わずかな宗教研究者が参照したのを除いて、ほとんど忘却された雑誌であった。改めて基本的な調査を重ね、世界宗教会議以降の実行教の諸活動について検討していく必要がある。